

東南アジアにおける 海外フィールドワークの実施

加藤 巖 所員・経済経営学部助教授

古岡文貴 マレーシア国立サバ大学講師

Sharon Cheuk マレーシア国立サバ大学講師

Grace Phang マレーシア国立サバ大学講師

1. はじめに

和光大学経済経営学部の国際経済学ゼミナール（2年生）は、2004年の夏期休業中にマレーシア・ボルネオ島においてフィールドワークを実施した。本稿は、その報告である。こうした報告をまとめるのは、その記録を長く留めることはもちろんのこと、今後行われるであろう多くの海外フィールドワーク実施者の参考になることを期待してのことである。

最近では、大学ばかりか高校や中学校などでも海外へ学生や生徒を引率していき、現地で何らかの活動を行う教育プログラムが数多く実施されるようになってきている。そうしたものの中には長年実施されてきたものもあるだろうが、現状ではまだまだ担当教員の裁量に任されたものが多い。そこで、それぞれの海外フィールドワークを担当する教員が自らの体験を持ち寄って互いの活動を知ることは重要である。他の海外フィールドワークの長所や短所を検討して今後の活動に生かすことが可能になるからである。また、互いが持つ人的ネットワークが明らかにできれば、その相互利用も可能になるであろう。

いわば、本稿の目的は、海外フィールドワークに関して各教員が持つノウハウを大学の組織全体の共有財産にすると同時に、その他多くの教育機関の共有財産にすることにある。

さて、上記フィールドワークの概略であるが、日程は2004年8月31日（火）から同年9月11日（土）までの12日間であった。参加学生は総勢12名で、その内訳は男子8名、女子4名であった。学科別の構成は、経済学科7名、経営メディア学科3名、人間関係学科1名、研究生1名であった。引率は経済

学科助教授の加藤巖であった。

また、マレーシアでの受入れ機関は、University of Malaysia Saba (UMS) などの大学や NPO 法人であった (詳細は後述) 。特に UMS のビジネス経済学部では、古岡文貴博士の日本語と英語の 2 ヶ国語による講義 (日本と東マレーシアの関係) があった後、Sharon Cheuk 講師と Grace Phang 講師の尽力で日本人学生とマレーシア人学生の合同セミナーが実施された。日本人学生の語学力の水準からコミュニケーション不足が心配されたが、学生間の互いの努力により終始活発な議論がなされた。

なお、本稿は上記 3 名 (古岡博士、Cheuk 講師、Phang 講師) と加藤巖が協議しながら成果をまとめたものだが、便宜上、一人称をもって語られる。

2 . 日程の概略

日程は、図表 1 の通りである。その概要は以下の通りである。全日程は 2004 年 8 月 31 日 (火) から同年 9 月 11 日 (土) までの 12 日間であった。ただし、初日と最終日は移動だけで費やしており、正味の滞在期間は 10 日間であった。

この間、参加者全員が東マレーシアのサラワク州の州都クチンとサバ州の州都コタキナバルを訪れている。最初に訪れたクチンは 8 月 31 日から 9 月 7 日まで滞在している。

9 月 8 日には、もう 1 つの訪問先であるコタキナバルへ移動して、同地に 9 月 10 日の夕刻まで滞在した。9 月 10 日の夕刻にコタキナバルからマレーシアの首都クアラルンプールへ移動した後、同日の深夜にクアラルンプール発成田行きの便で帰国の途についた。成田到着は翌 9 月 11 日の朝 7 時半ごろであった。

全日程を通じて訪問したのは、国立大学 2、NPO 法人 1、国立公園 2、博物館 1、民族文化村 1、地元マーケット 3 などであった。これ以外にも青年海外協力隊員や現地林野庁の方からお話を伺ったり、地元の人達とサッカーの試合を行ったりといった機会もあった。

なお、初日に至るまでの準備作業は引率教員が行い、各参加者への連絡は電子メールを利用した。夏期休業中に参加者全員のスケジュールを調整して一同に集まる機会がなかなか作れず、結局、事前に全員が集まることは 2 回ほどであった。参加者は先述の如く、男子 8 名、女子 4 名の総勢 12 名であった。

図表1 日程表

	日付	曜	事 項	滞在地	宿泊ホテル
	8/31	火	(MH71) 成田発 13:30 クアラルンプール着 19:40 (MH2530) クアラルンプール発 20:45 クチン着 22:30	クチン	ホリディ・イン・クチン
	9/1	水	現地ツーリストインフォメーション訪問 クチン市内見学(マーケット見学・サラワク博物館など)	クチン	ホリディ・イン・クチン
	9/2	木	NPO「アジア地域福祉と交流の会」理事長からレクチャー 青年海外協力隊員からレクチャー 懇談会	クチン	ホリディ・イン・クチン
	9/3	金	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS サラワク大学) 訪問	クチン	ホリディ・イン・クチン
	9/4	土	自由行動(マレーカンポン・猫博物館など) サンデーマーケット	クチン	ホリディ・イン・クチン
	9/5	日	バコ国立公園	クチン	国立公園内バンガロー
	9/6	月	バコ国立公園からクチン市内へ移動 自由行動	クチン	ヒルトン・クチン
	9/7	火	カルチュラル・ビレッジ	クチン	ヒルトン・クチン
	9/8	水	(MH384) クチン発 9:00 コタキナバル着 10:25 University of Malaysia Saba (サバ大学) 訪問	コタキナバル	シャングリ・ラ・タンジュナル
	9/9	木	トゥンク・アブドゥル・ラーマン国立公園	コタキナバル	シャングリ・ラ・タンジュナル
	9/10	金	自由行動(コタキナバル市内見学) ホテルチェックアウト 17:00 (MH2623) コタキナバル発 18:45 クアラルンプール着 21:10	コタキナバル	機内泊
	9/11	土	(MH2530) クアラルンプール発 23:30 成田着 7:30 解散・帰宅	—	—

3. 出発日の様子

出発日の様子は以下の通りである。まず、出発に際しては、参加者が成田空港へ11時までに来て、各自が搭乗手続きを行うようにした。事前に学生達へ航空券を手渡し、各自で搭乗手続きを行えるようにしておいた。

実は当初、担当教員が全員分の航空券を預かり、当日の朝には参加者全員を集めて点呼を取ることも検討した。しかし、担当教員が交通機関の事故などで遅刻した場合のことや、参加者はそれぞれの自宅や下宿先から成田空港へ集まるので到着時間にもバラツキが出るといったことから、各自が航空券を持ち、空港へ到着した順に搭乗手続きを取ることにした。そのため、

参加者に担当教員とは出国審査場ないしは出発ゲートで会うことを伝えておいた⁽¹⁾。

13時30分成田発のマレーシア航空機(MH71)に搭乗した。クアラルンプールへは約6時間半のフライトで到着した。到着後、国内線へ乗り換えた。乗り継ぎ時間は65分間であった。通常、国際線と国内線の乗り継ぎには60分以上なければ認められない。今回の65分間は乗り継ぎ時間として最短のものといえる。実際、12名の学生を引率して広い空港内を国内線ゲートへ向かうには少々余裕のないことであった。ただし、その間に全員が空港内の銀行で両替を行うこともできた。空港内の2つの両替銀行は、空港内モノレール発着所の脇にあった。この隣り合った2つの銀行では両替レートが若干違っていたが、学生達には為替レートを確かめるゆとりは無かったようだ。

その後、マレーシア国内線に乗り換えて、目的地のサラワク州の州都クチンに到着した。時刻は現地時間の22時30分過ぎであった。スムーズに入国審査を終え、学生達はタクシーに分乗してクチン市内のホテルに向かった。ホテル到着後には全員でホテル近くのコンビニエンスストアへ行ってミネラルウォーターなどの簡単な買物をした。そして、その場で、翌朝の集合をホテルロビーに10時として解散した。

4. 現地滞在の様子(クチン)

翌日(9/1)は10時の集合時間に遅れる学生が多く、実際の出発は10時40分ぐらいであった。まず、現地の人々が集まる食堂へ行き食事をした。雑居ビルとビルの間にあるオープンスペースの食堂で、日本の感覚では簡易食堂といった趣である。食事は現地の庶民の食べ物であるラクサ(辛い汁そば)などであった。学生達は、その独特の風味と価格の安さ(3リング=約90円)に驚いていた。また、マレー系の食堂だったので、豚肉料理の無いことやハラール肉(イスラム教徒が食べる肉で、イスラムの宗教的な意味合いを持つ作法で屠殺されたもの)の話などにも驚いていた⁽²⁾。

食事の後、クチン市内の政府観光案内所へ出向き、市内の地図などを頂戴した。交渉はゼミ長をはじめ数名の学生が行った。観光案内所の職員との会話は、学生にとっては大きな緊張の連続であった。なお、マレーシア国内の(政府)観光案内所は資料も豊富で、良く訓練された人材を配置している。観光が貴重な外貨を獲得する主要産業との認識が感じられる。観光案内所の後

(1) 後日、確かめたところ、参加者全員が出発の2時間前以上に成田空港へ到着していた。また、遠隔地の参加者は他の学生の自宅へ前日夜に宿泊したとのことだった。

は、市内の生鮮食品市場（オープンマーケット）へ見学に出掛けた。現地の買物客に交じって、売り場を散策すると、学生達は日本でも馴染みのある野菜や豆腐、豆乳、お揚げ、（チャンポン）麺などがあることを知ったり、インド系の店舗では盛り上げられた香辛料に驚いたりしていた。また、学生達は、隣接の魚市場ではサメやナマコなどを含む豊富な魚介類が販売されていることを意外に感じたようだ。

市場の後には、サラワク博物館へ徒歩で向かった。この博物館には、サラワク州の豊かな自然や多くの民族の生活習慣などが学べるように展示に工夫がなされていた。ただし、学生達は前日の長時間の移動や現地の気候のため、疲労が重なっている様子で、展示物への興味は大きくなかったようだ。夕食は各自が取り、翌日まで自由行動とした。

3日目（9/2）は、午前中から現地の国立大学（University of Malaysia Sarawak：UNIMAS）を訪問した。マレーシアの国立大学の中で、UNIMASは10番目に出来た比較的新しい大学である。クチン市内からはタクシーで40分ほどの郊外にある。医学部を含む8学部を擁する総合大学で、東マレーシアのエリート校である。授業は英語で行われており、広大な敷地に数多くの建物と最新の設備が用意されている。

今回の大学側の受け入れ組織は学生自治会であり、私達が到着すると、自治会のメンバー20名ほどが盛装で迎えてくれた。男子学生は民族に関係なくスーツ姿が大半、マレー系の女子学生は民族衣装を身にまとい、頭にはトドンと呼ばれるスカーフを巻いていた。大学の本部（事務棟）で挨拶を交わした後、学生自治会主催の昼食会となった。出迎えと昼食会には、工学部学部長、副学部長、学科長など数人の教員が参加してくれた。この席上、工学部学部長から積極的に日本の大学との交流を図っていきたい旨の発言があった。

(2) ハラル（Halal）とはコーランの用語で、「許された」または「合法的」という意味である。このハラル食品とは、アラー（神）からイスラム教徒が食べることを許されたもののことである。よく知られるように、牛や羊、山羊、鶏などをハラル食品とするには、Zabihahというイスラムの作法によって屠殺しなければならない。概ね、その手順は以下の通りである。まず、屠殺する動物を地面に横たえる。ないしは、小動物の場合は手で持つ。動物の食道や気管、首の血管を鋭いナイフで切断する。その際、動物の頭部を切り離さないようにする。屠殺の際に「Bismillah Allah-u-Akbar」と唱える必要がある。こうした作法を必要とするのは、イスラムの作法以外で屠殺した動物、すなわち、絞め殺したり、殴り殺したりした動物は体内で血が固まって悪臭を放ち、不純になるという考えがあるようだ。ちなみに、イスラム教徒が食べることを禁じられているものは、豚肉やその副産物、動物の血液やその副産物、肉食動物、爬虫類や昆虫類などがある。また、動物の死体、屠殺される前に死んだ動物、他の動物が食べ残した肉なども食することはできない。さらに、敬虔なイスラム教徒が「疑わしい」として食べないものにゼラチンや酵素、乳化剤やグリセリンなどを含んだ食品がある。<http://www.azhar.jp>を参照。

昼食会では、マレーシア人学生と日本人学生が混合でテーブルにつき、様々な話題で話に花が咲いた。終始、賑やかな雰囲気であった。昼食会後は、図書館や情報センターなどの施設を案内された。案内の説明は、マレーシア人学生が英語で行ってくれた。その後、マレーシア人学生がパソコン教室でパワーポイントを利用して、大学の沿革、マレーシア社会の解説などをしてくれた。若干の質疑応答などもあり、学生同士の交流がもたれた。帰りのクチン市内へは大学側の好意により、中型バスが用意されていた。マレーシア人学生達も同乗してくれて、車上においても学生同士の交流が進んだ。この日あたりから、学生達が英語で話すことに躊躇が無くなってきたように感じられる。少なくとも英単語の羅列でも、現地の人とコミュニケーションを取ろうという姿勢が見られるようになった。

4日目(9/3)は、マレーシア現地で障害者への支援活動を行っている日本の特定非営利活動法人(NPO法人)「アジア地域福祉と交流の会(ACE)」を訪問した。まず、ACE理事長の中澤健氏に1時間ほどのご講演をいただいた。このACEは現在、主としてマレーシアの障害児教育や障害者の自立支援活動を行っている。その一環として、これまで中澤氏はペナン島において、乳幼児の障害児を受け入れる「First Step Center(早期療育センター)」や障害者の作業所である「Stepping Stone(地域生活支援センター)」、知的障害成人の就労を目指したプログラムの場として「STEP Center(職業訓練センター)」を立ち上げ運営されている。また、ヴァンに玩具などを積み込んで村の集会所や障害児家庭への訪問を行う「Mobile Toy Library(移動おもちゃ図書館)」も実施している。中澤氏の講演の中では、こうした活動の紹介以外にも、中澤氏が活動を始めた理由などに学生達は大きな関心を払っていたようだ。講演の後には、学生達との活発な質疑応答があった。

引き続いて、日本の海外青年協力隊員である上杉誠氏からもお話を伺った。レクチャーは、約1時間であった。上杉氏には私達の訪問日時に合わせて時間を取ってもらい、ACEへ来ていただいた⁽³⁾。上杉氏は、海洋生物、特に海亀の保護を目的とした活動に現地の人々と共に従事されており、その専門の話は学生達にとって興味深いものであったようだ。また、上杉氏が若く、学生の年齢に近いこともあってか、質疑応答やその後の食事の際には、学生との間で現地の日常生活や若者などの話題が盛り上がっていた。中澤氏、上杉

(3) 実は、クチンのACE事務所は中澤氏の自宅を兼ねており、そこが現地在住の日本人のよく集まる場所となっている。上杉氏によれば、中澤氏の奥様の手料理などでもてなされることが多いとのことだった。

氏のお話の後には、もう1人の青年海外協力隊員や現地で働く日本人女性、また、現地の林野庁に勤めるマレーシア人官僚、その家族などが加わって、懇談会を兼ねたバーベキューを行った。

翌5日目(9/4)は、自由行動日とした。学生個々は毎日興奮しているせいか、やたらと元気にしているのだが、その多くは疲れも見せ始めていた。午前中は休憩を取った学生が多かったようだ。午後から、一部の学生達はクチン市内のマレーシア人居住地区(マレーカンボン)に出掛けた。ちなみに、カンボンはマレー語で村の意味である。そこで、マレーカンボンは、マレーシア人の村ということになる。よく知られるように、マレーシアはマレー系、インド系、中華系などが一緒に暮らす複合民族国家である。国全体ではマレー系住民が多数派であり、イスラム教が国教となっている。民族構成はマレー系が約65.1%、中華系が約26.0%、インド系が約7.7%、その他が約1.2%となっている。これに伴い、マレー語が国語(公用語)であるが、街中では、中国語やタミール語、英語などもよく使われている。また、宗教もイスラム教だけではなく、仏教、儒教、ヒンドゥー教、キリスト教、原住民信仰など幅広いものが混在している。クチン市内にも回教寺院、キリスト教会、仏教寺院、儒教の廟などが隣接して存在している。ただし、東マレーシアのサラワク州においては、多数派がイバン族などの現地に伝統的に住んでいた民族である。英国の植民地だった影響もありキリスト教徒が多いことも含めて、西マレーシアのマレー半島側とは社会の組成やその様子が随分と違っている。

先述のように、クチン市内にはマレーシア人居住地区(マレーカンボン)がある一方で、中華街もあり、両者は川を挟んで向かい合っている。実は世界的に見ても珍しいことだと思われるが、1つの市にマレー系市役所と中華系市役所の2つが存在している。そして、そのそれぞれに市長がいる。つまり、1つの市に2人の市長がいて、民族毎の市政を取り仕切っているのである。学生達が訪れたのは、私達が宿泊していた中華街側からは川向いのマレーカンボンであり、どちらかと言うと経済的には見劣りがする地区である。マレーカンボンを歩くと、回教寺院からはアザーンと呼ばれるお祈りが聞こえてくる。仏教のお経よりももう少し抑揚があり、甲高い声で歌うような調子である。それをスピーカで流している。子供達もイスラム教徒の装いである。後日の報告会での学生からの発表でも、マレーカンボンでは子供達の様子が一番印象深かったとのことだった。この5日目は土曜日であった。クチンでは毎週末にサンデーマーケットと呼ばれる青空市場が開催されており、山間民族などが野菜や果物などを持ってマーケットに参加する。夜は、学生

達全員がサンデーマーケットの見学に出掛けた。

6日目(9/5)は全員が朝8時半にホテルをチェックアウトした。この日は、クチン郊外のバコ国立公園へ向かった。朝9時に出発し、バスと途中からボートに乗り換えて約1時間半でバコ国立公園へ到着した。日本から事前に予約をしておいたツアー会社のガイドは英語を話すとのことだったが、そのガイドは実際に会ってみると鹿児島で仕事をしていたことのあるとのことで、かなりの程度日本語がしゃべれた。おかげで、学生達の理解度が随分と上がった。バコ国立公園は、マングローブ林に囲まれた小さな島嶼である。そこで観察できたマングローブは、沖縄で見られるものとは随分と種類が違っていた。また、私達が実際に目にした動植物はテングサル、尾長サル、イボイノシシ、ウツボカズラなどである。特に、世界的に見てもテングサルは生存数が少なく、バコ国立公園は貴重な生息地となっている。幾つかのトレッキングコースをガイド付きで歩き、上記以外にもユニークな動植物を観察した。夕食はバーベキューであった。夜は公園内のバンガローで過ごした。そのバンガローは冷房も無く、安普請であった。部屋は狭く、カビ臭い。その部屋には、ベッド4台が並んでいるだけで掛け布団も無い。水道も雨水を溜めたものを利用しており、飲料にはならない。トイレは水洗であったが、その脇に設置されていたシャワーは、誰も使わなかった。恐らく、学生達にとって、ここでの1泊以上の宿泊は困難だったろうと思われる。

翌日7日目(9/6)は朝からトレッキングなどをした後、帰り支度をした。クチン市内へはボート、バスの順番で乗り継いで帰った。クチン市内に戻り荷物を預けておいたホリディンホテルに向かった。この日午後からヒルトンホテルに移動して2泊した。その後、夕方からは自由行動とした。大半の学生は部屋で休んでいたようである。

なお、帰りのバスの車中で、ガイドが色々と現地社会の民族模様を話してくれた。学生達も興味を持ったようだった。特に、複数の民族が1つの共同体で暮らしていることから生じる事柄に強い関心を示す学生が多かった。例えば、ガイドが言うには、現地のイバン族はマレー系と結婚したがない。その理由は、イスラム教に改宗すると豚肉が食べられなくなるからとのことだった。日本人が聞くと笑い話のようだが、豚やイノシシは山間部に暮らすイバン族にとっては貴重な動物性蛋白源である。また、イバン族の結束は固く、時には地方政府と対立することもあった。そうした際には、イバン族出身、ないしは数代さかのぼっても肉親がイバン族だったという経歴の議員が説得にあたるとのことであった。ガイドの話は、イバン族の事柄が多かった

が、こうした多民族社会を巡るエピソードは、先述のクチン市に中華系とマレー系の2人の市長が存在することとも相通じるものを感じさせる。学生達も、複雑に絡み合った民族模様は、普段暮らしている社会とは違ったものであるとの認識を肌で感じた様子だった。

8日目(9/7)は朝9時出発で学生達は全員、カルチュラルビレッジへ向かった。前日までの日本語が堪能なガイドに改めてツアーをお願いした。カルチュラルビレッジは一種の民族博物館で、広い敷地の中にサラワク州に住む各民族の住居が移築されている。ここは「生きている博物館」などと呼ばれており、移築された住居は様々な形で実際に利用されている。すなわち、その生活ぶりがある程度見て知ることができるようになっている。例えば、民族楽器を製造していたり、サゴヤシからでんぶんを取り出し、それでケーキを焼いていたりとといったことである。なお、移築された建物は、ビダユー族、イバン族、ブナン族、オラン・ウル族、マラナウ族、マレー系、中華系のそれぞれの民家およびその付帯施設である。

5. 現地滞在の様子(コタキナバル)

9日目(9/8)は朝7時前にチェックアウトを済ませて、タクシーに分乗してクチン空港へ向かった。この日はクチンから国内線で約1時間半ほどのサバ州の州都コタキナバルへ移動した。この日は、午前中から現地の国立大学(University of Malaysia Saba: UMS・国立サバ大学)へ訪問することになっていた。コタキナバル空港には10時半ごろ到着。直ちに、ホテルへ行きチェックインをした。

チェックインを済ませて間もなく、国立サバ大学から迎えるバスがホテルへやって来た。学生達もあわてて、筆記用具、カメラなど必要なものだけ持ってバスに乗り込んだ。国立サバ大学では、日本人教員である吉岡博士はじめジェームス博士など現地スタッフとビジネス経済学部の学生達20名ほどが迎えてくれた。国立サバ大学も広大な敷地に、回教寺院(モスク)や学生寮を含む多くの美しい建物が立ち並び、教育環境は非常に整っている様子だった。驚いたことは、水産学研究のためにキャンパス内に栈橋や港があったことである。その両脇には白い砂浜の大学のプライベートビーチが整備されていた。やはり、国立サバ大学もUNIMASと同様、MBAコースや大学院を含む総合大学である。

大学到着後、学生ともども昼食をごちそうになった。昼食後、吉岡博士による「日本と東マレーシアとの関わり」と題する講義が英語と日本語を使っ

て行われた。受講したのは日本人学生と現地スタッフ、国立サバ大学の学生達であった。講義終了後、日本人とマレーシア人学生の混合チームを作り、グループディスカッションを行った。そして、ディスカッションの結果はグループごとに代表者を選び発表をした。ほとんどのグループでは、マレーシア人学生が英語で発表を行ったが、1つのグループのみ日本人学生が英語で発表を試みた。全ての発表を聞いた後、現地スタッフと相談をして、最も優れた発表をしたグループに優秀賞を進呈した。日本人学生は英語の面で苦労が大きかったが、しかし、彼らは事前の予想以上に積極的にディスカッションに参加していた。何よりも、それまでの1週間で現地の人とコミュニケーションを取ることに慣れてきていたといえる。自分の伝えたいことを伝えるまで何度でも繰り返し伝えようとする姿勢が見られるようになっていた。

講義とディスカッションが終った後で、学内を案内された。学内でお祭が開催されていたこともあり、そこに日本人学生、マレーシア人学生みなが参加し交流が図られた。全ての予定されていた行事が終了した後、ビジネス経済学部副学部長を表敬訪問した。忙しい合間を縫って、多少の話をさせていただいた。この話の中でも、副学部長側から、積極的に日本の大学と提携を図っていきたい旨の発言があった。より具体的には、学生同士の交換留学、研究者同士の相互訪問などである。

10日目(9/9)は午前中からトゥンク・アブドゥル・ラーマン国立公園内の島々を訪れ、三々五々海辺で過ごした。学生達は美しい海とサンゴ礁、熱帯魚の群れに感激の面持ちだった。宿泊しているホテルからは、直接に公園内の幾つかの島にスピードボートが出ており、気軽に行き来することができた。大半の学生は、終日、ホテル内外で過ごした。若干名の学生がお腹を下し気味となっていた。10日間の慣れない土地での食事は、僅かずつ学生達の胃腸の調子を狂わせたようだ。こうした時、施設の整ったホテルに宿泊していることは、医療や食事の面で心強いものであった。今回の宿泊先は、徐々に宿泊先のグレードを上げていき、最後の宿泊先が最高ランクであった。こうした配慮は、短期間でも海外フィールドワークの際には大切であろう。

最後の11日目(9/10)は、夕方17時にホテルをチェックアウトして、コタキナバル空港から国内線でクアラルンプールへ行き、そこで真夜中発成田行きの便に乗り換えて帰国の途についた。

チェックアウトまでの時間に、多くの学生がホテル発のシャトルバスを利用してコタキナバル市内へ出掛け、お土産などを購入した。お土産として彼らが選んだものは、地元サバ州の名産品である紅茶(Saba Tea)が多かった。

値段も手頃で、軽く持ち運びが便利であった。ちなみに、今回の日程中には免税店などへ行く機会は全く無かった。修学旅行などでは最終日に買物の時間などを取るようだが、そうした必要性はない。地元のお店で、現地の人と触れ合いながら、自らが品物を選ぶ行為は学生達にとって貴重な体験である。

夕方、各自がチェックアウトを済ませると、タクシーに分乗して空港へ向かった。前述のように、クアラルンプール経由で帰国の途についた。

そして、翌日（12日目・9/11）の朝7時半頃、成田空港へ到着した。成田空港ではゼミ長から挨拶があり、その後、自由解散となった。

6. おわりに

先日、ある講義の中で60名ほどの受講生へ「南の島のイメージ」を絵にしてもらい、多くの受講生達は、波間に小さな島がぼつんとあり、その海岸には背の高いヤシの木が生えている絵を描いた。

絵を見ると、受講生達が描いたヤシの木は、割合、正確に描かれている。木の高さ、葉の茂り具合、実の付く場所とその形状などもおおよそ正しい。ある学生が描いた絵には、サルがヤシの木に登って、実（ココヤシ）を取る様子を描いたものもあった。実際、マレーシア東海岸のクランタン州コタバル市南郊では、ココヤシの収穫に「サル使い」が活躍する。この地方では、ココヤシ専門のサル使いが、サルを椰子の木に登らせてココヤシを落とさせている。その様子を以下に記しておこう⁽⁴⁾。

“サル使いはサルの腰に長い紐をつけ、その一方の端を握っている。紐はサルの逃亡を防ぐためであり、また紐の引き具合でサルにごく単純な指示（下りろ、止めろといった）を出すためでもある。首に縄をつけたサルをココヤシの木の根元に放つと、スルスルと木に登っていく。そして、熟れたココヤシをクルクルと何回かひねり、ねじって落とす。見ていてもなかなか能率がよく、次々に音を立ててココヤシが落ちてくる⁽⁵⁾。”

こうした「サル使い」の様子を描いた学生に問うと、以前に何かで見たことがあるとの答えであった。実は、絵を描いたのは、経済経営学部の選択科目である開発経済学を選んだ学生達であり、もともと他の学生に比べると、熱帯地方の島々や開発途上国などに関心が高かったと言える⁽⁶⁾。この意味で、

(4) 森本孝「ヤシのある風景と生活」鶴見良行・宮内泰介編著『ヤシの実のアジア学』コモンズ所収 p.184

(5) 注(4)同じ。「このサル使いは専業ではなく、副業として行われている例がほとんどだという。人間による採取がないわけではないが、コブラ生産を行うほどのココヤシを所有している家では、サル使いを雇って採取している。」

学生達がヤシの木を正確に描くことはもっともなことかもしれない。しかし、ほとんどの受講生が、「南の島＝ヤシの木」というイメージを持つこと、すなわち、その南国を考える意識の上でのヤシの木の浸透度には驚かされる。

南の島のイメージであれば、なにもヤシの木だけではなく、バナナの木を描いたり、マングローブを描いたりしてもよさそうなものである。しかし、学生達にとって、南の島といえばヤシの木なのである。

ここで考えてみたいのは、もしかすると、私達は東南アジアという地域をたった1つの枠組みの中で捉えているのではないかという疑いについてである。先の授業中の問い掛けは、「南の島のイメージ」だったので、それだけをもって余りにも飛躍した結論を語るといわれるかも知れない。しかし、仮に「東南アジアのイメージ」と問い掛けた時、どれだけの幅を持った答えが学生達から戻ってくるのか、甚だ心もとなく感じざるを得ない。

連日のように「躍進するアジア」といった類いの情報が流されている。「アジアの時代」が称揚されるようになってからも久しい。そして、現在の大学生が卒業後にビジネスの現場で東アジア、東南アジア、南アジアと関わりを持つことは日常茶飯事となっていくであろう。そんな時、彼らは自分が抱いてきたイメージとの落差に驚くことになるのではないだろうか。大学はじめ教育機関に勤める私達は、アジア地域と紐帯が深まる今こそ、近隣のアジア各地、なканずく東南アジアとの接点をもう少し深く、幅広く持てるような教育プログラムを考えていく必要があることは間違いない。

一概に東南アジアと言っても、そこに住む人々は多彩である。それぞれの文化・生活習慣・価値観も多様である。これまで、東洋と西洋を結ぶユニークな位置を占めてきただけに、その内部には実に様々な価値観を飲み込んできた。そこは、通り一遍の授業では語り尽くせない意外性と多様性に満ちている。そして、その歴史には、しばしば日本も重要な役回りを持って登場している。日本との関わりも古く、そして、興味深い。

こうした地域に対して、もし、若い学生や生徒の間に単純化されすぎた概念や、いわゆるステレオタイプと称されるような単線的な認識が広まっているとしたら、それらを払拭することは喫緊の課題である。単線的な認識は、ややもすると偏見や人種や異なる文化に対する差別に結びつきやすいからである。

上記を受けて、日本と同地域との将来にわたる緊密で安定的な関係を築く

(6) 受講生の中には、南米で暮らした経験を持つ学生やこれまで環境問題を学んだ後に編入学してきた学生などがある。彼らは、体験を通して発展途上国の様々な情報を得ている。

ことは、互いの若者の交流に始まる。この意味で、東南アジア社会の多様性について、現地の暮らしを通して体験する海外フィールドワークの実施は意義深いものといえるだろう。

（かとう いわお）

